

## インタビュー技術研究班 10 年の歩み

有澤田鶴子・大林惇子・片寄洋子  
狩谷洋子・滝本いずみ・深谷久美子

### 要旨

インタビュー技術研究班は、ACTFL-OPI(以下 OPI)に臨む時の不安や問題を少しでも解消できたらという思いから、2000 年に発足し、活動を続けている。被験者の口頭表現能力を最大限に引き出す効果的なインタビュー方法を探るため、個々のテストの持つ情報・技量を共有し、分析してきた。

2010 年までの活動で、2001 年に「中級インタビューの質問に現れた話題分析」、2003 年に「ACTFL-OPI における質問の分析—上級」について、2006 年に「超級のインタビュー分析」について発表した。

また、インタビュー技術を探っていく過程で、超級被験者の発話傾向に多くの共通項があることがわかり、2009 年 8 月に「超級話者の発話に見られる接続表現の特徴」について発表した。

【キーワード】OPI インタビュー技術、話題・質問の流れ、質問のレベル、質問の切り口、接続表現

### 1. はじめに

OPI テスターは被験者の口頭表現能力を最大限、かつ確実に引き出しているだろうか。フロアは同じでもサブレベルにおいて差異が生じることはないだろうか。こうした疑問から、本研究班はインタビュー技術を向上させる必要性和意義を感じて研究活動を開始し、各段階における成果を発表してきた。以下、これまでの発表内容を報告する。

### 2. 中級の話題分析 <共同研究者> 坂本悦子・山口千秋 <研究協力者> 力武幸子

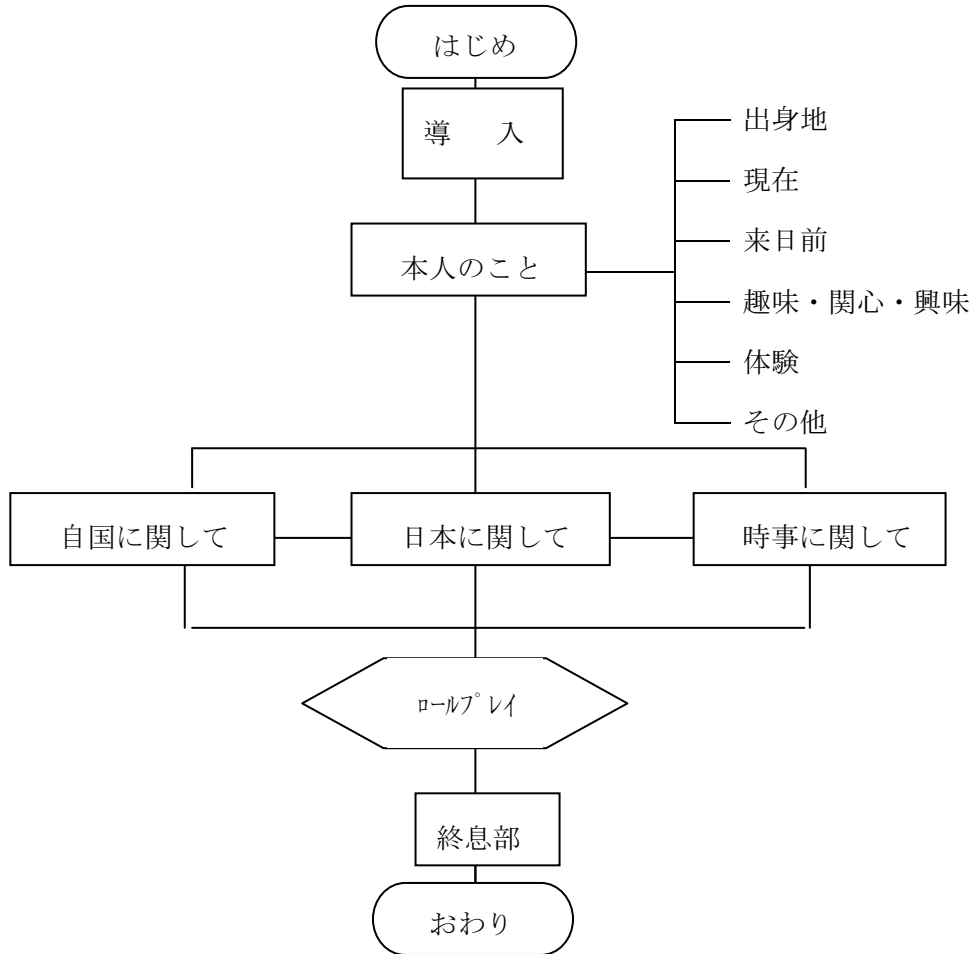
2001 年、日本語 OPI 10 周年記念フォーラムに於いて「ACTFL-OPI 中級インタビューの質問に現れた話題分析—インタビュー技術の向上をめざして—」を発表した。

話題分析は、まず、複数の公式テスターにより評価が確定した中級インタビューテープの話題を集めた。次に、集めた話題をカテゴライズし、中級話題のフローチャート(図 1)と話題分類表(中級インタビューで取り上げられた話題として抜粋掲載 資料 1)を作成し、分析・考察を行った。

その結果、中級インタビューの質問の流れを俯瞰的に見ることができた。話題を可視化することでインタビューの手順が把握しやすくなる。話題のかたよりが防げるだけでなく、提示した話題がうまく進まなくてもスムーズに他の話題に移ることができるだろう。

また、中級の話題の傾向としては「本人に関すること」が多いこと、サブレベル間では自発性の差とウチからソトへの話題の変化がみられることなどを具体的に確認することができた。最後にプレースメントテスト、教材作りへの応用を提案した。

＜図1＞中級話題のフローチャート



＜資料1＞ 中級インタビューで取り上げられた話題

2001年日本語 OPI 10周年記念フォーラム「ACTFL-OPI 中級インタビューの質問に現れた話題分析—インタビュー技術の向上をめざして—」の「中級話題分類表」より抜粋

自国に関すること

- ① 気候
- ② 文化・習慣・伝統：料理、結婚、宗教、言語、交通手段、建築物など、生活の様子、芸能、昔話
- ③ 教育：教育全般、コンピュータ教育
- ④ 社会現象
- ⑤ 事件・事故・ニュース

日本での出来事

- ① 感じたこと：苦労・大変さ・困ったこと、驚き、喜び・楽しさ
- ② 体験：アルバイト・仕事、行ったところ・旅行、住んでいたところ、滞日の期間、仕事の手伝い、日本人の外国人を見る目、ホームステイ、スキー、地震

## 日本に関すること

- ① 印象：イメージの変化、印象(第一印象含む)、長所・短所
- ② 気候
- ③ 文化・習慣・伝統：料理・食べ物、レストラン・飲み屋、交通手段、買い物
- ④ 社会現象：流行、事件、若者について
- ⑤ 旅行：行ってみたいところ
- ⑥ 教育

## 比較

- ① 二国間：学生・若者、人間(女性/男性)、文化・習慣・伝統、仕事、言葉・言語行動、料理、天候、教育、交通機関、マナー、教えることの違い、自然環境・町のようす  
国際化、TV、生活、買い物(コンビニ)、文化施設など(映画館)
- ② その他：日本での訪問先、日本語と英語、スポーツ

## 時事に関すること

- ① 社会：環境問題、治安、最近のニュース
- ② 経済
- ③ 国際関係
- ④ その他：進歩について

## その他

- ① 将来のこと：今年やってみたいこと、学校を卒業してから、抱負・希望、帰国の時期
- ② 最近のこと：自分のニュース

**3. 上級インタビューの分析**

＜共同研究者＞ 坂本悦子・山口千秋

上級インタビューの話題分類は、話題が多岐にわたっていて中級と同様の分類は困難だったため、インタビューの流れを視覚的に表し、その特徴を探ることにした。

分析の対象は、主要レベル内での違いをより明確にするために「上級-上(11本)」と「上級-下(9本)」に絞り、全質問を「0～3」のレベルに分けた(表1)。レベルは『ACTFL-OPI 試験官養成用マニュアル』(1999)(以下マニュアル)を参考に、「内容」「機能」「型」を総合的に判断した。次に同一話題内における質問のレベル推移、時間の推移を一体化させた蛇の目スコープ(図2)と質問と答えのやりとりがわかる話題のフローチャート(図3)を作成した。

上級-上ではレベル3の質問が多いと予想したが、実際は異なっていた。低いレベルの質問でも、被験者の発話がレベル3の質問の答えに相当していたため、上級-上になった。

また、上級-下ではテスターからの話題提供が多く、話題毎にかかった時間の差異はあまりないが、上級-上ではテスター側からの話題提供が導入部分だけのこともあり、かかった時間は話題によって異なっていた。

以上のことから、上級でも下の方のレベルでは、テスターは常に新たな話題を準備し、提供する必要がある、上のレベルでは、被験者の話の中に次の話題へのヒントがより多くあると言えるだろう。

最後に質問レベルの意識化とイメージトレーニングについて提案した。インタビューを

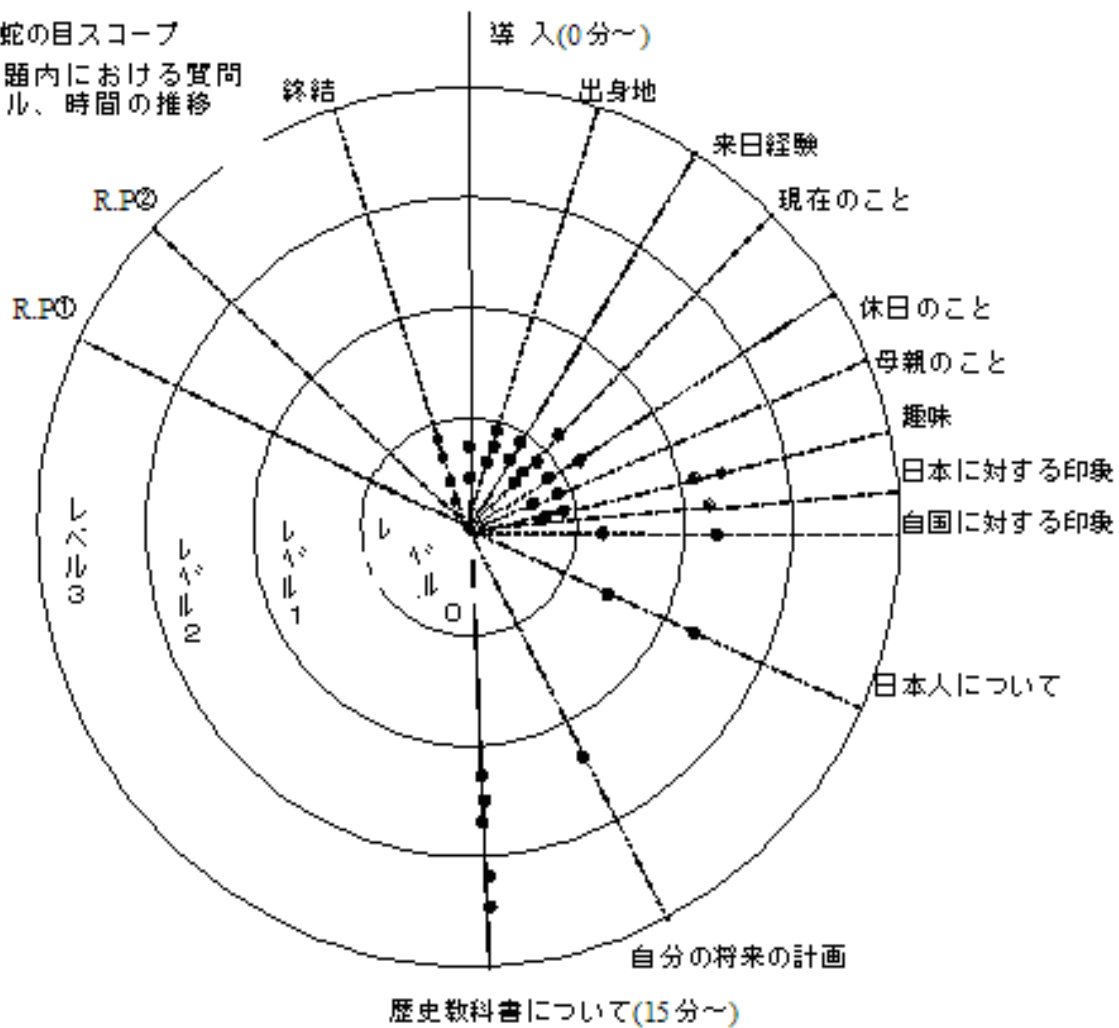
する機会が少ないというテスターも多く、インタビュー技術の維持・向上はテスター共通の悩みである。マニュアルを基本に、スコープや話題のフローチャートのようにインタビュー全体を俯瞰してイメージし、質問のレベルを意識しながらスパイラル、トリプルパンチを考える、一種のイメージトレーニングを行い、来たるインタビューに備えたい。

＜表 1＞レベル「0～3」の分類基準

| レベル | 基準   | 質問例  |
|-----|--|--|
| 0   | <ul style="list-style-type: none"> <li>日常生活における最もありふれた事項</li> <li>単純な名詞文で一語一文で答えられる質問(はい・いいえ、選択疑問詞、イントネーション疑問文)</li> </ul>                         | 「いつ日本に来ましたか」<br>「趣味って何ですか」<br>「日本は初めてですか」<br>「男の子ですか。女の子ですか」   |
| 1   | <ul style="list-style-type: none"> <li>日常生活や身近な状況に関する、一般的に予測し得る話題</li> <li>基本的で、複雑ではない答えを求める質問(事実や情報を求める疑問詞)</li> </ul>                            | 「どんな所・町ですか」<br>「『じゃんけん』ってどんな時使うんですか」<br>「ご家族をご紹介していただけますか」<br>「どうして高校で日本に留学したいと思ったんですか」<br>「そんなとき先生としてはどんな気持ちですか」                        |
| 2   | <ul style="list-style-type: none"> <li>個人的、一般的な興味に関する話題、説明(詳しい説明含む)、描写、手順、比較、個人的見解に基づく意見を求める質問</li> </ul>  | 「～さん自身の意見っていうのは、その歴史の教科書問題についてはどういうふうに考えていますか」<br>「本場のカレーっていうのはどうやって作るんですか」<br>「不法に入国して、どんな問題が起こるんですか」<br>「ラマダンというのはどういうものか、説明していただけますか」 |
| 3   | <ul style="list-style-type: none"> <li>広範囲にわたる一般的興味に関する話題</li> <li>いくつかの特別な関心事や専門領域に関する話題</li> <li>裏付けのある説明、一般的・客観的根拠に基づく意見、仮説、反論を求める質問</li> </ul> | 「日本でもそうですけれども、女性が働いている場合どうしても女性に負担がかかる。だったら、専業主婦でもいいのではないかという意見もあるんですが、それに対してはどうお考えになりますか」<br>「極東地の対策を区が一番偉い人だったら、どのようにおたてになりますか」        |

(2003 年第 2 回 OPI 国際シンポジウムにおける発表「ACTFL-OPI における質問の分析—上級」より抜粋)

<図2> 蛇の目スコープ  
同一話題内における質問  
のレベル、時間の推移



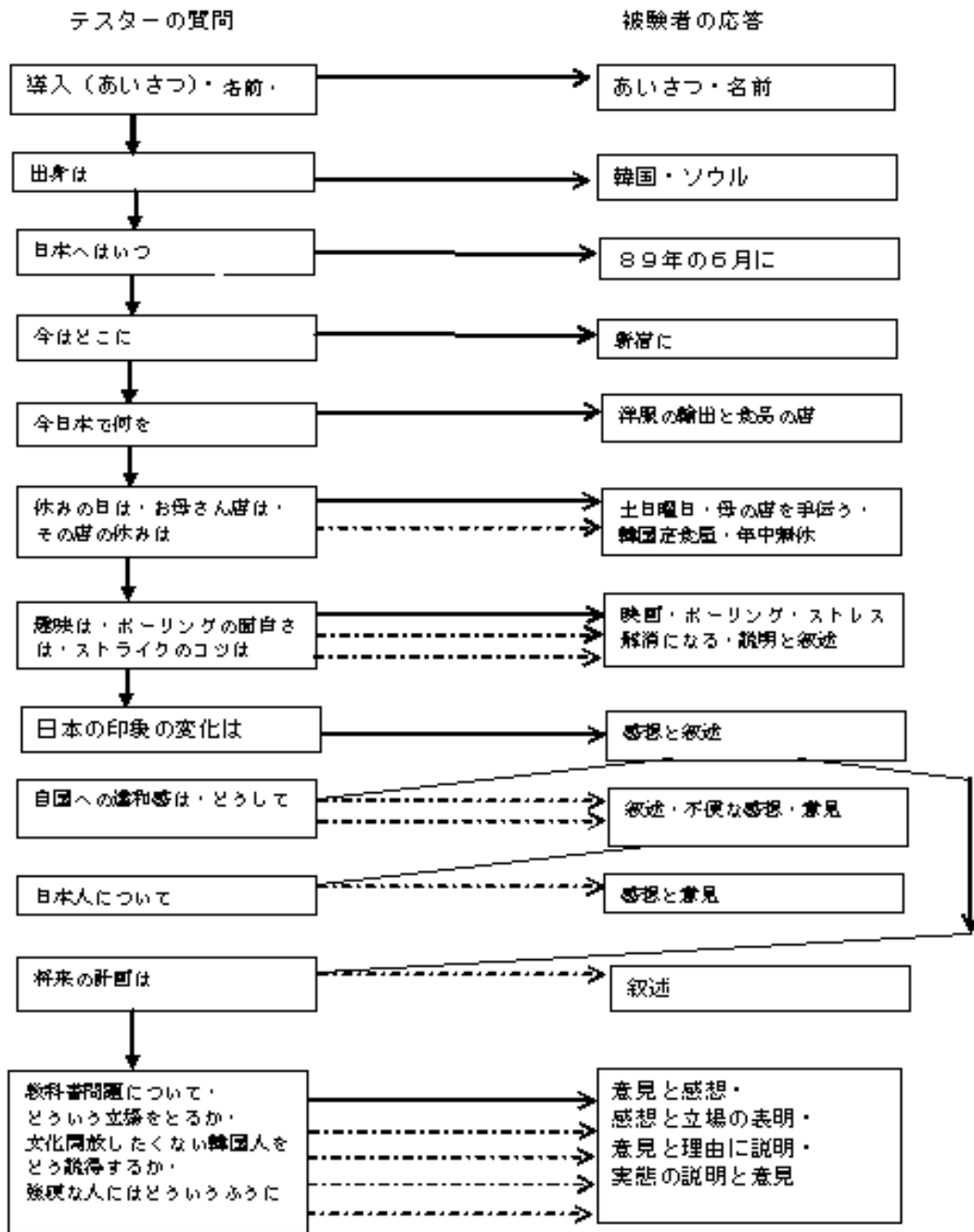
\* 図 2、図 3 は上級-上の同一インタビュー

<図 3> 上級話題のフローチャート

太い黒線：テストから提示した話題の質問

点線：被験者の答えに沿って、さらに質問を重ねた場合

細い線：話題の出現が被験者からでそれを使ってテストが新たな質問をした場合  
すぐに質問する場合と、後でもう一度使う場合がある



#### 4. 超級

＜共同研究者＞ 山口千秋

2006年の定例会で超級インタビューの分析・考察結果として、「話題の整理かご」と「質問の切り口」を使用した方法、クラス活動への応用、超級インタビューの効果的な質問例について発表した。

##### 4-1 「話題の整理かご」と「質問の切り口」

マニュアルには「被験者の興味や経験に基づいた話題をベースにしてOPIを組み立てていく」(p.65)とあるが、超級の突き上げ部分でどのような話題から突き上げられ、それがどのように展開してくかを観察、分析してみると、テスターの方から話題を変えたり、被験者の話題を基に別の話題へ誘導したりする場合がある。このことはインタビュー技術を維持・向上させるためのトレーニングとしても、話題を準備しておかなければならないことを示唆している。そこで「話題の整理かご」と「質問の切り口」を使ったトレーニング方法を提案した。

「話題の整理かご」は、様々なニュース・情報から、超級に使いそうな話題をストックしておく大きな分類項目(かご)である。超級インタビューテープの分析から、次の項目を考えた。

##### \*整理かご

- ① 本人に属すること ② 文化・伝統・食 ③ 教育 ④ スポーツ・芸術
- ⑤ 環境問題(温暖化・汚染・ゴミ問題・発電所・オゾンホール) ⑥ 社会現象
- ⑦ 国際情勢 ⑧ 経済産業 ⑨ 政治・法律 ⑩ 宗教・倫理 ⑪ 労働 ⑫ その他

それぞれの「かご」の中には、自分の得意とする話題やタイムリーな話題を入れておき、随時更新する。また、どんな話題が突き上げやすいかを分析しておく。

分析したインタビューでは、「教育」に関する質問が超級の突き上げにまでなっている例が多かった。また、超級への突き上げとなっている質問の数と取り上げられている話題の数との関係を見てみると、突き上げが少ないインタビューは話題数も少なかった。逆に、突き上げが十分に行われているインタビューは4つ前後の話題を取り上げているものが多かった。教育やその他の話題について、日ごろから「かご」で準備しておくといいたい。

「切り口」とは話題をどのように考えるか、見るか、ということであり、「質問の切り口」はインタビューに出てきた話題を突き上げるのに便利なことばとなる。

##### \*質問の切り口(便利なことば)

公平、差別、競争、利便性、コストパフォーマンス、評価、多面性、影響、効果、その他

例えば、サッカーの話題が出て、超級レベルの突き上げに持っていこうと思った場合、これを「切り口」の中の、公平という観点から切ると、「韓国では、サッカー選手が兵役免除になるということですが、これは不公平だからどんなに優秀な選手でも、たとえワールドカップに出られなくても、まず兵役を優先するべきだという人がいます。これに対してどう考えますか?」という質問ができる。

また、同じサッカーという話題でも「影響・効果」という切り口からは、また異なった質問で突き上げることができ、仮説・反論へと展開していきやすい。我々は9つの「切り口」を考えたが、自分の展開しやすい「切り口」を用意し、ストックしておいた話題に対してどのような「切り口」で展開できるかを考えておくと、いざと言う時に慌てずに済むのではないだろうか。

#### 4-2 超級インタビューの効果的な質問を考える

意見を求めたつもりが状況説明で終わってしまった、反論がうまくいかなかった、抽象度のレベルが低い質問しかできなかったという例をよく聞く。被験者の能力を最大限に引き出すためにどのようなことを心がけたらいいのだろうか。「こうすればよかった」という自戒の念から超級インタビューテープを観察・分析し、そこで出てきた質問の改善例を考えた。

##### ① 詳細な説明を引き出す

YES/NO クエスチョンではなく、文の形で答えなければならないように聞く。これは被験者に得意分野へ誘導させないため、ターンを取られないようにするためでもある。また、的を絞り、ピンポイントで質問することも重要である。

「具体的に詳しく話していただけませんか」「実際にはどうなんですか」

「どんな対策が考えられますか」「そう思われる理由は何ですか」

「解決策について話し合われたことを説明してください」

##### ② 反論、仮説

反論はテストの感想にならないようにし、話題や意見を個人ではなく、社会問題に結びつけ、一般化する。具体例についての反論ではなく、考え方、論理についての反論をすべきである。さらに、状況説明の後すぐに反論するのではなく、被験者の意見を引き出してからその意見に対して反論する。

例：「でも、大変なんじゃないですか、(点を)つけるほうが」

→「採点が主観的になり、フェアじゃないという意見もあると思いますが」

仮説は、前出の「質問の切り口」公平、差別、競争、利便性、コストパフォーマンス、評価、多面性、影響、効果、その他 を使うと立てやすい。(例は前出)

##### ③ 質問のレベル(3. 上級のインタビュー<表1>参照)を上げる

###### \* 質問の抽象度を上げる

例：「あなたはどう思っていますか」

→「国民の声／意見はどうですか」「社会的影響は」「一般的にはどう思われていますか」

###### \* 語彙(特に漢語)や表現を工夫する

例：「なんかお弁当の味になれてしまって、私はちょっと問題かなって思うんですけど、その辺はどう思います」

→「食生活を外食産業に頼るということについてどうお考えになりますか」  
／〇〇さんの国ではどう受け取られていますか」

例：「人間的にはすごく立派な、すごい立派な行為ですけども、どうでしょう、そ



の辺・・・」

→「～ですけども、〇〇さんはその辺、どのような認識をおもちでしょうか。」

#### 4-3 クラス授業への応用

上記のような質問をされた場合、躊躇することなく答えられるようにするための練習を、会話授業ではなく中級レベルの作文クラスで試みた。4段論法の構成要素、現状 → 問題提起 → その原因 → 解決策をそれぞれじっくり考えたのちに、これをつなげてまとめるという練習である。構成要素を明確に分けたことで学習者の書く作業が容易になり、また、論理的思考法のトレーニングにもなった。よりスムーズな発話へ向けたクラス活動の1つである。

### 5. 超級話者の発話における接続表現の特徴について

「口頭表現能力を高めるための一提言—OPI 超級話者の発話調査から—」を 2009 年ソウル第 7 回 OPI 国際シンポジウムで発表した。インタビュー技術を探る過程で、超級被験者の発話傾向に多くの共通項があることがわかり、超級話者 19 人の接続表現を調査し、その類型化を試みた。日本人の発話傾向と比較するため、日本人 5 人の OPI データを参考にした。接続表現は、段落を作るうえで必要とされる結束性を強化し、高め、強固にする際に必要とされるものを考慮した。データ中の『日本語能力試験出題基準』にある接続表現の出現数・比率、異なり数、レベル比率について調べた。

顕著な傾向として、日本語能力試験の 1・2 級レベルの接続表現が極端に少ないことがわかった。超級話者、日本人とも 10% 前後しか使用していなかった。それに対して 4 級レベルの接続表現は超級話者が 36.6%、日本人が 34.7%、また、3 級レベルの接続表現は超級話者が 53.2%、日本人が 53.8% 使用していた。母語話者も超級話者も、談話を構成し結束性を高めるための接続表現が、限られた表現にかたよっていた。(表 2)

他方、異なり数では 2 級以上のレベルの出現比率が高くなるが、それでも最高で 35%、最低で 9% である。3・4 級レベルの異なり数の出現比率は 65~90% と高い。

また、調査をすすめるうちに「～という」の多用に気づき、以下の 4 パターンに分けて集計した。

- ① ～という N(名詞)(4 級) ② ～というコト/～というの(3 級) ③ というか(2 級)
- ④ ～というふう/よう(2 級)

最後に、初級後半の早い段階から文を長くし、段落の発話へ発展させていく以下の練習を提案した。

- ① 初級の接続表現を複数使って文を長くする練習。
- ② 「という N(名詞)」の N に「状況・場合・程度・立場」などの抽象語彙を入れ、パターンとしてチャンク(かたまり)で練習することで、より高度な内容表現へとつなげていく。

＜表 2＞接続表現出現数・比率

|                       | 接続表現                      | 超級話者 |       | 日本人 |       |
|-----------------------|---------------------------|------|-------|-----|-------|
|                       |                           | 件数   | %     | 件数  | %     |
| 4 級レベル                | ～て／～で                     | 807  | 20.3  | 125 | 17.5  |
|                       | たり～たり                     | 178  | 4.5   | 13  | 1.8   |
|                       | ～とき                       | 97   | 2.4   | 22  | 3.1   |
|                       | ～てから                      | 19   | 0.5   | 3   | 0.4   |
|                       | ～から                       | 152  | 3.8   | 52  | 7.3   |
|                       | ～というN                     | 172  | 4.3   | 24  | 3.3   |
|                       | その他（まえに・あとで・ながら・それから）     | 33   | 0.8   | 9   | 1.3   |
| 4 級小計                 |                           | 1458 | 36.6  | 248 | 34.7  |
| 3 級レベル                | ～けれども                     | 549  | 13.8  | 133 | 18.6  |
|                       | ～とか                       | 240  | 6.0   | 42  | 5.9   |
|                       | ～し～し                      | 139  | 3.5   | 14  | 1.9   |
|                       | ～ので（んで）                   | 204  | 5.1   | 15  | 2.1   |
|                       | ～と                        | 176  | 4.4   | 52  | 7.3   |
|                       | ～というコト                    | 262  | 6.6   | 71  | 9.9   |
|                       | ～ば                        | 92   | 2.3   | 15  | 2.1   |
|                       | ～たら                       | 111  | 2.8   | 8   | 1.1   |
|                       | だから、～                     | 93   | 2.3   | 3   | 0.4   |
|                       | でも、～                      | 85   | 2.1   | 3   | 0.4   |
|                       | ～ても                       | 54   | 1.4   | 7   | 1.0   |
|                       | そして、～                     | 20   | 0.5   | 20  | 2.8   |
| その他（なら・たまま・ために・～が・のに） | 91                        | 2.3  | 2     | 0.3 |       |
| 3 級小計                 |                           | 2116 | 53.2  | 385 | 53.8  |
| 2 級レベル～               | それで、～／で                   | 150  | 3.8   | 20  | 2.8   |
|                       | ただ、～                      | 21   | 0.5   | 2   | 0.3   |
|                       | というか                      | 123  | 3.1   | 36  | 5.0   |
|                       | というふう／というよう               | 42   | 1.1   | 11  | 1.5   |
|                       | ことから                      | 12   | 0.3   | 0   | 0.0   |
|                       | その他（だって・あるいは・また・しかも・つまり等） | 58   | 1.5   | 13  | 1.8   |
| 2 級～ 小計               |                           | 406  | 10.2  | 82  | 11.5  |
| 合計                    |                           | 3980 | 100.0 | 715 | 100.0 |

(2009 年第 7 回 OPI 国際シンポジウムにおける発表「口頭表現能力を高めるための一提言—OPI 超級話者の発話調査から—」より抜粋)

## 6. おわりに

本研究班は、この 10 年間、インタビュー技術に関して様々な観点から分析を行ってきた。10 年にわたり研究を継続できたのは、焦らず自然体で臨んできたからに他ならない。今後もこれまでの研究をベースに、新たなテーマを探りながら、インタビュー技術の向上に貢献できればと願っている。我々の提言をインタビューの場面で多少なりとも役立てていただければ幸いである。

本研究班は日本語 OPI 研究会のご支援をいただき、また数名の会員の方々からはテープの提供をいただいた。ここに感謝の意を表したい。

## 参考文献

- 牧野成一監修・日本語 OPI 研究会翻訳プロジェクトチーム翻訳(1999)『ACTFL-OPI 試験官養成用マニュアル(1999 年改訂版)』アルク
- 牧野成一他(2001)『ACTFL-OPI 入門』アルク
- 荻原稚佳子他(2001)「上級・超級日本語学習者における発話分析—発話内容領域との関わりから—」国際交流基金日本語国際センター『世界の日本語教育』第 11 号, 83-102
- 庵功夫他(2001)『中級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 鎌田修・嶋田和子・迫田久美子(2008)『真の日本語能力をめざして～プロフィシエンシーを育てる』凡人社
- 川口義一(2008)「日本語教育のための文法記述の可能性」『早稲田大学日本語教育の歴史と展望』第 6 章 早稲田大学大学院 日本語教育研究科編
- 国際交流基金(2002)『日本語能力試験出題基準改訂版』凡人社
- 泉子メイナード(2004)『談話表現ハンドブック』くろしお出版
- 日本語 OPI 研究会(2002)『日本語 OPI10 周年記念合同フォーラム論文集』
- 野田尚史(2005)『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版
- 山内博之(2009)『プロフィシエンシーから見た日本語教育文法』ひつじ書房